

月例研究会（2011年4月27日）

大原社研と私——在職32年

吉田 健二

私は本年3月に大原社研を退職した。報告は研究回顧というより研究所において私が従事した仕事を紹介し、あわせて研究所の32年を概観する形をとった。なお報告は、1入所と産別会議の資料整理、2復刻・出版事業への参加、3音声資料の収集と公開、4回顧と提案、の柱から成っている。まず私は学問上の師として、平貞蔵、増島宏（法大教授）、村山重忠（同）の三先生をあげて感謝の言葉を述べた。平先生は郷里（山形県長井市）の先輩で、評論家としても知られ、近衛文麿首相のブレインの一人だった。

1979年2月、私は占領期の左派系労働組合の全国組織＝産別会議の資料整理と分析という課題を担って入所した。資料整理は6年に及んだが、この間、私は資料整理の成果を活かし、「産別会議の成立過程」や「経済復興会議の成立と運動」などの論考を発表した。

入所以来、私の主要な業務は2と3であった。2の復刻・出版事業への参加においては、『社会・労働運動大年表』（旬報社、1986年）、シリーズ「戦後社会運動資料」（法政大学出版局、1991年～2002年）、『日本の労働組合100年』（旬報社、1999年）、『日本労働運動資料集成』（全13巻・別巻1、同、2005年～2007年）があるが、私はいずれの企画にも編集委員として参加した。

このほか2では、研究所創立80周年の記念事業として、戦前期の『大原社会問題研究所雜

誌』の復刻（日本経済評論社、2000年）や、中北浩爾先生との共編『片山・芦田内閣期経済復興運動資料』（全10巻、同、2000～2001年）を著した。私は前者に関しては解題し、後者についても中北先生と分担して執筆した。

3の音声資料＝オーラル・ヒストリーの収集と公開の仕事は、研究所における私の仕事を特徴づけるものだと思う。音声資料の収集は、占領期のユニオン・リーダー、日本共産党の幹部、社会運動家、政党機関紙や政論紙の編集者など32年間で93名に及ぶ。証言の一部は、大原社研編『証言産別会議の運動』（御茶の水書房、2000年）、『証言占領期の左翼メディア』（同、2005年）ほかに収められ、また私自身、研究所における音声資料の収集の全容についてこれを紹介した（「大原社会問題研究所のオーラル・ヒストリー」、大原社研編『人文・社会科学研究所とオーラル・ヒストリー』御茶の水書房、2009年）。

私が入所した1980年代、研究所は改革期にあった。二村一夫先生の発意・指導のもとに、研究会の月例化、『研究資料月報』の『大原社会問題研究所雑誌』への改題と毎号の雑誌評、資格を問わない文献・資料の閲覧、また研究所Webサイトの開設、とくに研究所の文献・資料や研究成果をインターネット上で公開するデジタルライブラリー（電子図書館・資料館）の開設は画期的かつ先駆的であった。

4の回顧と提案では、これらの試みを例として、研究所が、私の在職中に着実かつ大きく発展をとげたことを体験を交えて紹介した。そして、報告の結びとして、私が担った仕事との関連で、音声資料の公開へ向け、著作権の同意や媒体転換（デジタル化）の作業を急ぐべきことを提案した。

（よしだ・けんじ 法政大学大原社会問題
研究所嘱託研究員）